

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015  
東京都東大和市中央 1-539-15  
<https://tohoku-saiko.jp/>  
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Creat e , TOHOKU!

2 0 2 5 年（ 令 和 7 年 ） 10 月 16 日 木 曜 日

無料

第161号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）10 月 16 日 木曜日

【当新聞発行責任者  
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人  
歴史映像作家兼プロデュー  
サー。3 作目の「古代製鉄の  
埋もれた歴史を発掘した映像」  
の【奪われた古代鉄王国】は  
大崎上映会は延期。と  
いえ新型コロナ禍を乗り越え  
て4 作目制作に向けて奮闘中。  
興味は古代史・縄文を日  
文化研究。埋もれた歴史を  
発掘することと東北から  
日本を変えることを標榜。



## 佐々木朗希がリリーフ投手で大活躍！

シリーズ終盤に先発からリリーフに大転身

PSシリーズに「奇跡の救世主」として急浮上



佐々木朗希のダイナミックな投球フォーム  
・・・Yahoo ニュース10/6 より

東北出身の世界的ス  
ポーツ選手が新たに出現  
当新聞ではこれまで、東  
北出身の世界的スポーツ選  
手として、世界の野球界を  
けん引するアメリカ大リー  
グ・ドジャースの大谷翔平  
選手をずっと応援してきて、  
その活躍のたびに、何度も  
取り上げてきた。

しかし、ここに新たな選  
手がすい星のように出現し  
たのだ。

同じく岩手県出身のドジ  
ヤース所属の佐々木朗希投  
手である。  
これで、同じ岩手県出身  
の菊池雄星投手を含めると  
大リーグに三名の所属とな  
り、日本だけにとまらず、  
アメリカでも、岩手県の野

球が注目されることだろう。  
大リーグ初挑戦の前半  
戦は不調の佐々木朗希  
今シーズン、鳴り物入り  
でドジャース入りした佐々  
木朗希投手だったが、その  
前半戦は非常に不調だった。  
先発投手としてのデビュ  
ーも苦いものとなり、それ  
だけでなく、様々なメジャ  
ーの洗礼を浴び、苦難の連  
続だった。  
結局、メジャーに残れず、  
二軍での長い調整を余儀な  
くされることになった。  
そのまま調整が長引き、  
今期のメジャー昇格はむず  
かしいのかと誰もが思っ  
ていたところ、さまざまな幸  
運で昇格のチャンスが巡っ  
てきたのだった。  
ひょっとしたら、彼は余  
程の幸運の持ち主なのかも  
しれない。

ドジャースのブルペ  
ン陣が絶不調

周知のように、大リーグ  
のオールスター戦を過ぎて  
からのドジャースのブルペ

劇的な再デビュー

当紙面の下に記載した先  
月下旬から今月十三日まで  
のメジャー昇格後のリリー  
フの戦績を見て欲しい。

これが、二軍で四苦八苦  
しながら調整を続けてきた  
投手の戦績だろうか？まる  
でどこからか突然現れたナ  
ゾのリリーフ投手ではな  
いのか？少なくとも、今の  
佐々木朗希投手は「大変身」  
を遂げたのだ。

これで、苦境のどん底に  
あったドジャースのブルペ  
ン陣の「救世主」になったの

ン陣は絶不調で、先発がど  
んなに頑張ってもリードし  
ても、ブルペン陣が打ち込  
まれたり、フォアボールを連  
発したりした結果、逆転負  
けを喫する場面が頻発した。  
シリーズ前半だけを見れ  
ば、楽勝のトップでポスト  
シーズンを迎えられと思  
っていたのが、二位のパド  
レスに並べられたり、実際  
二位に転落したりしていた。  
何とかうまい方法はない  
かとチーム内だけでなく、  
ファンもそう思っていた。  
シリーズ途中にブルペン陣  
の補充も行ったが、後半戦  
には役に立たず、焼け石に  
水といった具合だった。

そんな状況のところに、  
二軍で調整中の佐々木朗希  
投手が尻上がり調子を上  
げているというニュースが  
来て、早速メジャーに昇格  
させてリリーフ投手として  
登板させてみようと思っ  
ったようだ。

### 佐々木朗希投手の10/13までのリリーフ投手転身後の戦績一覧

戦績コメント	日付	相手チーム	回	投球数	被安打	奪三振	与四死球	失点	記録
メジャー復帰戦 で初ホールド	9/25	Dバックス	1回	13球	0	2	0	0	ホールド
リリーフ2戦連続 無失点！	9/27	マリナーズ	1回	12球	1	2	0	0	ホールド
ポストシーズン ワイルドカード	10/2	レッズ	1回	11球	0	2	0	0	-
ポストシーズン DSシリーズ	10/5	フィリーズ	1回	11球	1	1	0	0	セーブ
ポストシーズン DSシリーズ	10/7	フィリーズ	1/3回	2球	0	0	0	0	セーブ
ポストシーズン DSシリーズ	10/10	フィリーズ	3回	36球	0	2	0	0	-

は当然である。  
この展開には、野球関係  
者だけではなく、大勢のフ  
ァンの誰もが驚いたはずだ。  
圧巻は、十月十日の試合。  
MLBの豊富なデータを取  
り扱う会社も公式Xにて、  
衝撃の記録を打ち立てたこ  
とを次のように報じた。

「MLBのポストシーズン  
史上、シリーズを制する勝  
利で八回、九回、十回をすべ  
てパーフェクトに抑えた投  
手は米球界史上たった一人  
しかない。そのただ一人  
の投手は、ドジャースの23  
歳ルーキーであるロウキ・  
ササキだ」

いつまでこの状況が続く  
のかと皆が思っていたとこ  
ろ、リーグ優勝決定シリー  
ズのブリュワーズ戦では途  
中交代となり、記録は足踏  
みしたが、まだまだ伝説は  
続いていくと思われる。  
ぜひ頑張ってもらいたい。



# 東北水産業の未来 その②

## 列島近海の魚の異変はまだまだ続いている

TVではサンマが豊漁で安くてうれしいという程度のニュースにとどまっているが、ほんとうはもっと大変なことになっているのではないか？もっともっと大騒ぎしなければならない事態ではないのか？しかも東北水産業だけの問題ではなく、日本水産業の大問題が起きているのではないか？

### カツオも不漁、秋サケも不漁、ホヤもサバも不漁(156号)

### このままだと日本近海の魚が入れ替わってしまうのか？

TVは政治ばかりで「魚の異変」を報道しない

このところ、TVを中心としたマスメディアは国内政治動向の話で持ち切りだが、他方、日本近海の魚の異変を大々的に取り上げるところはほばない。

せいぜいのところ、サンマが豊漁程度の話しか取り上げていない。

漁業従事者には大問題で死活問題だというのに、また、これからまた食卓に提供される魚の顔ぶれがガラリと変わりそうだというのに、ほば無視の状態である。

それならばと、当新聞が前号に続いて、この問題を取り上げようと思う。

前号では、サンマ、黒潮蛇行問題、イセエビ、イカを取り上げたが、今回は別の魚を取り上げるが、それでもそれらは一部ではない。

#### 日本近海の魚の異変

#### ーカツオ

まずはカツオである。生鮮カツオの水揚げでは二十八年連続日本一を誇る宮城の気仙沼市で、今シーズンの水揚げが極端に少なく、関係者からは不安の声が聞かれている。

気仙沼港での今シーズンのカツオの水揚げは約五十五トンと、去年同時期（千二百二十九トン）のわずか四%に留まっているとのこと、比較にならないほど大きく落ち込んでいる。漁業情報サービスセンタ

ーによると、伊豆諸島沖の海水温が例年より低いいためカツオの北上が遅れ、水揚げは去年より低水準になる見通しとのことだが、関係者は心配で仕方がない。

別の関係者は「カツオ漁を」五月から始めているけど、五月からちよっと少ない。七、八月からがたと落ちた。」

例年であれば、いまが水揚げピークだが、流れてきたのはカツオではなくビンナガマグロ。

「ビンナガが終わってから、カツオが少しでも出てくれたら嬉しい。（カツオの群れは）まだ今のところ全然見えません。」

宮城県水産技術総合センターの研究員の話によれば「房総半島沖には4キロを超える大きなカツオの群れがあちこちいて、そうするとより近い千葉県の勝浦の方で水揚げすることが多くなる。どうしても気仙沼の方の水揚げが今伸びていない」

#### 日本近海の魚の異変

#### ー秋サケ

変化しているのはカツオだけではない。

まずは北海道の秋サケを取り上げよう。当然のように存在するサケがなくなるというのは異常である。専門業者によると、秋鮭

は今年不漁のようで、イクラもほとんど取れないような状態。秋鮭に関しては良い話は少しもない。水産資源などを調査する研究機関によると、

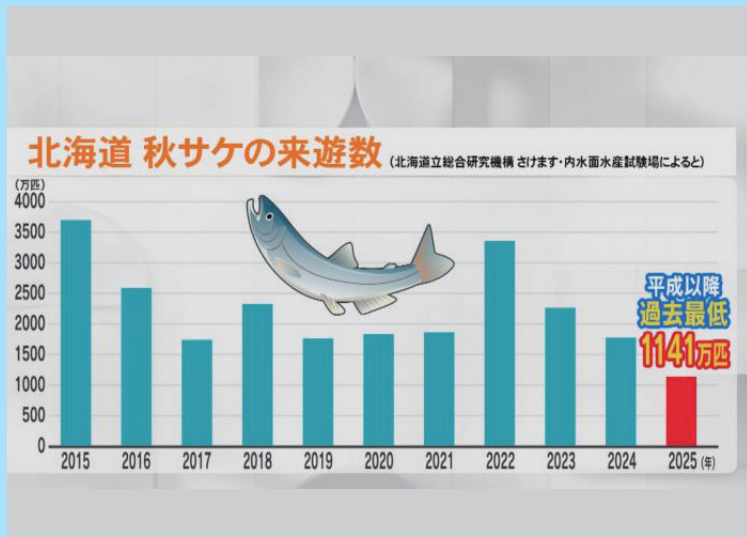
二〇二五年に北海道にやってくるサケは、平成以降で過去最低のおよそ千四百一十一万匹の予想。いずれも不漁だった前年をさらに下まわる予測とな



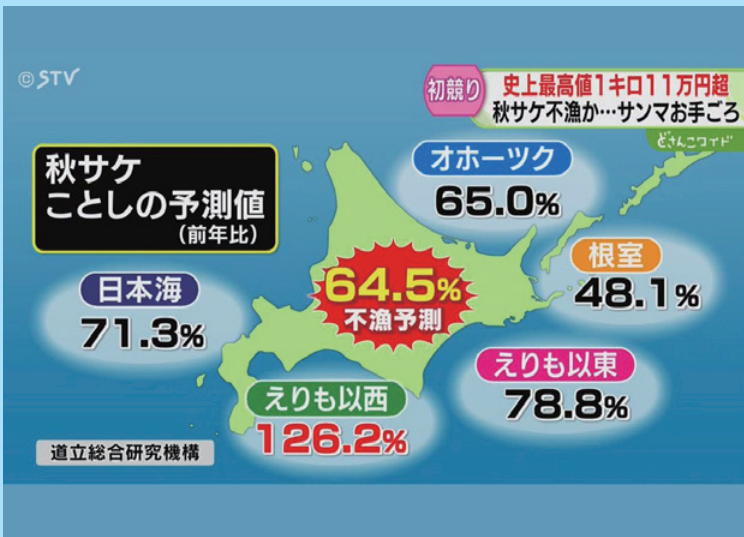
宮城・気仙沼の生鮮カツオ不漁  
・・・ミヤテレNEWS (2025.6.18) より



昨年と今年のカツオ回遊状況  
・・・TBS NEWS DIG (2025. 9.22) より



北海道秋サケ来遊数平成以降最低  
・・・東海テレビ 2025.9.5配信



北海道の秋サケ予想  
・・・STVニュース北海道 2025.9.2より

っている。道内全体では二〇二四年の六十四・五%と、秋サケは二〇二五年も不漁で高値が続く見通しとのことだ。

不漁の原因は、海水温の上昇が一因で、サケが好むプランクトンの減少によるものとみられている。ホヤとサバについては、当新聞百五十六号を参照して欲しい。



## カキは現在は小粒で割高だがいずれ解消される？

### 養殖カキまで不漁かと心配されたが出荷遅れのみ

今年のカキは成長遅いが不漁ではない

一般的に、カキの不漁は、地球温暖化による海水温の上昇、異常気象、食害、養殖環境の悪化など、複数の要因が複合的に絡み合っ

今年、海水温の上昇による影響が顕著で、近年の異常な暑さにより海水温が高くなり、カキの成長が遅れ、身が小さくなる原因にもなっている。

ただし大不漁というほどの状況ではないのでひと安心である。

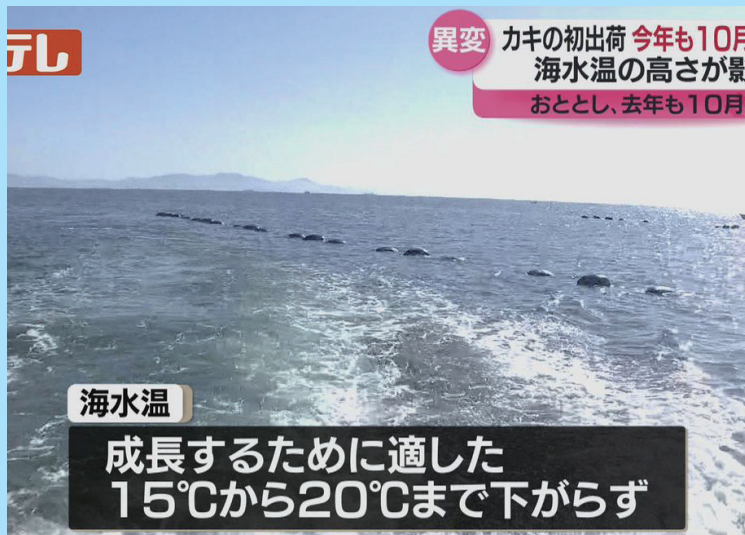
いまのマガキは小粒

十月初旬現在、東京のレストランで見るマガキは小さい。本来であれば十月初め頃に入荷が始まり、大きな身を味わえるマガキだが、



これまで  
生育順調

温暖化で カキ出荷遅れ  
・・・ミヤテレNEWS（2025. 9.22）より



海水温

成長するために適した  
15℃から20℃まで下がらず

海水温下がらず  
・・・ミヤテレNEWS（2025. 9.22）より

今年は猛暑の影響で海水温が上昇したため成長が遅れ、今出回っているものはサイズが小さくなっている。また、都内にある別のお店でも、「マガキの入荷シーズンが例年に比べて遅れており、小ぶりなのに値段は高くなっている」などの声が聞かれる。

温暖化により養殖カキの出荷に遅れ

県内からむき身のカキが集められ、県の漁協が大きな色などを確認した。その結果、例年は県内産の生食用カキは九月二十九日が出荷解禁日だが、今シーズンには海水温の上昇などにより生育が遅れていることから、解禁日を十月二十七日と決定した。一昨年は十月三十日、昨年は十月二十八日と、ここ数年は出荷解禁日の九月二十九日から大幅にずれ込んでいる状況が続く。

海水温が下がれば成長

急激な寒冷化に期待が寄せられていることだろう。カムチャツカ地震による津波の影響  
今年七月、ロシアのカムチャツカ半島付近で巨大地震が起きて、津波も発生して、カキ棚が被害を受けた。被害を受けた宮城県気仙沼大島のカキ養殖施設では、十月からの出荷に向けて復旧作業が続いていたようだが、何とか間に合うことを祈る。

## 『黒潮大蛇行説』を徹底検証する！

### サンマ豊漁一黒潮大蛇行終了説はまちがいか？

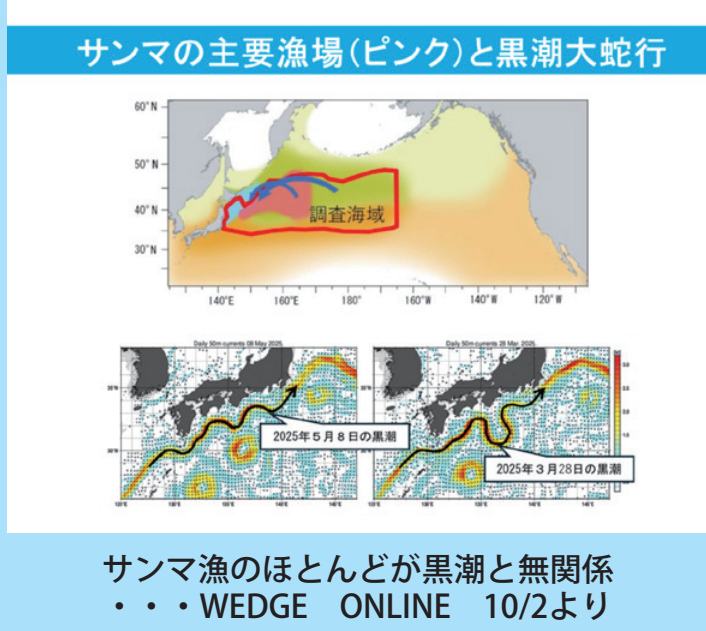
「黒潮大蛇行終了」によるサンマ豊漁説はマスコミ報道の勘違いか？

今年になつてのサンマ豊漁が、黒潮大蛇行終了によるものとのマスコミ報道が盛んだが、どうも実態とは異なるようだ。

そのことを端的に指摘した記事があるので、コメント抜きで、東京海洋大学特任教授の片野歩氏の見解の一部を原文のまま転載する。（WEDGE ONLINE 10/2）

（略）サンマが獲れるようになった原因として「黒潮大蛇行」がなくなったからという報道を見かけます。黒潮大蛇行は1980年代以降で4回起きました。そして4回目（2017年）から7年以上続き、今年（25年）の5月に解消しました。

様々な魚が獲れなくなっています。その理由として「海水温上昇」「外国船が悪い」「クジラが食べてしまう」といった理由が3点セットのように出てくるのですが、それらに加えて出てくるのが黒潮大蛇行のせいでした。黒潮大蛇行の解消後にサンマ漁がはじまり、漁が上向いているので、理由としてうまくつながったように報道されています。上図はサンマの漁場で、下図が黒潮大蛇行の動きを示しています。上図の青色とピンクの境目がほぼ排他的経済水域（EEZ）です。



昨年（24年）度のサンマの漁獲は台湾・中国・日本などの漁獲合計で93%がピンクの公海でした。今年も、8月の解禁当初から日本漁船も公海に出漁し、他国の漁船が見えるような漁場で操業していました。したがって、漁獲量の大半が公海上であることに変わりありません。両方の図を比べていただければお分かりと思いますが、ピンクの公海での漁場と、黒潮大蛇行が影響する海域と漁場の位置関係は遙かかなたという関係です。

もちろん、全く影響がないとは言いませんが、豊漁の理由に結び付けるのは無理があるのです。（略）黒潮大蛇行により、漁獲量が増えた魚種もあれば、減った魚種もあるでしょう。しかしながら、全体の漁獲量推移で見ると、プラマイゼロどころか、全体の漁獲量が減り続けているので、漁獲量との相関性を見つけるのは難しいのです。黒潮大蛇行による影響を、都合よく解釈してはいけません。不漁が続いて深刻になっている太平洋のマサバ漁と比較するとよくわかります。（略）サンマの漁場が公海主体なのに対し、マサバの漁場は日本のEEZ内が主体です。また、黒潮大蛇行が影響している海域も漁場に含まれます。つまり、サンマよりはるかにマサバの方が黒潮大蛇行の影響を受けやすいのです。しかしながら、黒潮大蛇行の影響がほぼないサンマ漁が上向き、影響があってもおかしくないサバ漁は不漁のままというのが現実なのです。（略）



## 東北と祭り

### 際立つて多い東北の祭り

朝日新聞の「月刊データジャーナリズム」の二〇月六日付けのテーマが、「お祭り大好き！今日もどこかで」であった。全国各地のイベント情報を集約している「イベントバンク」のデータを基に、日本全国の祭りを日本地図にプロットし、人出の多さを円の大きさで可視化していた。

それを見ると一目瞭然なのであるが、改めて東北には人出が十万人単位以上の大きな祭りが多いことが分かる。具体的には東北では、北から青森ねぶた祭、五所川原立佞武多、八戸三社大祭、弘前さくらまつり、弘前ねぶたまつり、盛岡さんさ踊り、秋田竿燈まつり、角館の桜まつり、横手の雪まつり、仙台七夕まつり、山形花笠まつりが、大きな円として描かれていた。

東北には他にも大曲の花火、土崎港曳山まつり、花輪ばやし、北上・みちのく芸能まつり、新庄まつり、相馬野馬追、福島わらじまつり、郡山うねめまつりなど、一〇万人以上の人出となる大きな祭りがある。

一〇万人以上の人出を誇る祭りがこれだけ集まるのは、「お祭り大好き！」な日本の中でも東北が突出している。今回のデータを見ると、北海道はその規模の祭りが四つ、関東は七つ、中部は六つ、近畿も六つ、四国は二つ、九州は五つである。日本の中で、最もお祭りが好きなのが東北人、と言えるかもしれない。

今回のデータでは、全国の祭りが一年のうちのいつ開催されているかについて、グラフとして可視化されていた。それを見ると、最も多いのが八月、次いで四月であることが分かる。八月はももちろん夏祭り、四月は桜祭りが多いのだろう。その次に多いのは二月である。これは雪祭りなどだろうが、要は季節を問わずに祭りを

楽しんでいるのが我々日本人ということになるのだろう。全国的に見ると少ないように見えるが、東北では秋祭りも多い。これは農作物の収穫を祝い、感謝する趣旨の祭りが東北各地にあるからである。東北人は有名な夏祭りや桜祭りだけでなく、四季折々に祭りを行っていることが分かる。

東北に祭りが多いことは、東北の自然環境や歴史、文化、信仰などが大きく関係している。夏が短く、冬が長い東北の厳しい気候風土の中で、夏祭りは収穫の秋を前に、疫病や害虫を追いつ払い、五穀豊穡を祈る重要な行事であった。もちろん、その長く厳しい冬から解放された喜びを皆で分かち合うの意図もあっただろう。また、地域の一体感を確認し、その結びつきを強めるための重要な機会でもあったに違いない。

そもそも、祭りとは何なのか。元々の意味は、神や仏それに先祖を祀ることであった。ならば、祀るとは何か。神や仏を崇めて祈るという意味の他、先祖の霊を供養することも含まれる。自然からの恵みに対して感謝したり、逆に自然の脅威に畏怖し、悪いことが起こらないように祈る、それが祀ることの原点である。神に食料などを備えることは、献（まげ）と言った。

祭りはそこから様々な形に派生し、発展していった。神輿や山車が地域を練り歩くスタイルの祭りは多いが、これはこれらが神の乗る乗り物であり、それが地域を回ることによって災厄を払ったり、人々の願いを聞き入れたりとされている。松明を灯したり、火のついたものを振り回したりする火祭り、そしてそこには花火も加えられようが、それらは、その火の力で身を清めたり、霊力を強めたりすることを目的とした祭りである。

盆踊りは、もちろん先祖や亡くなった人を供養するための踊りである。祭りはまた、古代においては政治と一体視されていた。政が「まつりごと」と読み做わされるのはその証である。「祭政一致」と言われるが、統治者は神の言葉を民に伝え、民は自然の恵みである農産物を神に捧げ、そうして行われる循環がすなわち「まつりごと」であった。

日本人は無宗教と言われる。確かに、神社に行つて願い事をし、寺院に行つて墓参りをし、あるいは仏壇を拝み、クリスマスを祝い、という多くの日本人のありようを見ると、特定の宗教を信仰しているようには見えない。では、果たして日本人は、信仰心を持っていないのだろうか。決してそんなことはないどころか、日本人は今も並大抵以上の信仰心を持つ

お盆に帰省ラッシュが起るのはなぜか。実家に帰つて墓参りをし、先祖を迎える人が多いからである。屠殺された家畜の供養碑や供養塔も建てられている。殺虫剤メーカー各社は、害虫のための慰霊祭を執り行っている。他国の事情は知らないが、そのようなことを行っている殺虫剤メーカーは世界中で日本くらいなのではないだろうか。まさに「一寸の虫にも五分の魂」である。生き物だけではない。「針供養」は文字通り、折れたり曲がったりした針を供養する行事である。こうした数々の行動の背景には、並々ならぬ信仰心が感じられるのではないだろうか。

では、日本人の信仰心の拠り所とは何だろうか。それは、キリスト教やイスラム教といったような明確な教義を持ったものではないかもしれない。しかし、日本人の信仰には、「八百万の神」と言われるように、万物に

神が宿するという思想がある。「針供養」などはその典型と言えるかもしれない。また、神々しい姿の山に神を見、巨大な岩や大木に神が降りるのを見、その他山川草木全てに神がいて感じる、それがその信仰の原点のように見える。そうした信仰は精霊主義（アニミズム）と言われるが、日本の場合にはそれに仏教や神道、儒教や道教など、さまざまな思想や宗教の影響が加わって渾然一体となつている。とても一言では言えないが、少なくともその根底には、自然に対する崇拜と先祖に対する崇拜があるように見える。

これまで見てきたように、祭りが日本人ならではの信仰心と密接に結びついているのだとすれば、東北に祭りが多いというのは、東北の人の信仰心の篤さを物語っているとも言える。そしてそれは、一朝一夕にできたものではなく、遠い昔の先祖か

らずつと受け継がれ、大切に守り続けてきたものなのであろう。

東北各地から出土する縄文時代の土偶、実に多彩な形の土偶や岩偶が見つかつている。あれが何なのかについてはいろいろな議論があつてまだ定まつていないが、これはまさに八百万の神のいくつかを縄文の人たちが具現化したものではなかっただろうか。縄文人の信仰も、まさに精霊主義（アニミズム）であつたとされる。現代の私たちが今も心の中に持ち続けている信仰はまさにここが原点であつたのかもしれない。

東北に祭が多いというのは、東北人の信仰心の篤さだけでなく、東北の気候風土とも大きく関係があつたものと思われる。周知のように、東北は冬の寒さや雪の多さが特徴である。火山も多く、地震も多く、自然災害も多くあつた。その一方、火山に由来する温泉も豊富で、森林も多く自然の恵み

も豊かである。東北人にとつて自然は、畏怖すべきものであり、かつ感謝すべきものでもあつたわけである。

日本三大霊地のうちの二つは東北にある。青森・下北半島の恐山と秋田・川原毛地獄である。古来、霊山とされた山も多い。山形の月山、湯殿山、羽黒山の出羽三山を始め、青森の岩木山、岩手の早池峰山、山形の蔵王山、葉山、飯豊山、福島の霊山、一切経山など、枚挙に暇がない。これらも、東北人にとつていかに自然が尊崇する対象だったかを如実に物語っている。

スピリチュアルツアーの地としての東北

こうした日本人ゆかりの信仰が今の息づく地域である東北の魅力は、残念ながらまだ十分には知られていない。現在は、パッケージツアーからカスタマイズされたツアーへと人々の関心が移ってきている。出羽三山で既に行われているような

山伏体験や宿坊宿泊などを伴つたオリジナルなツアーが、日本国内のみならず海外の旅行客にも注目されている。

そうした日本人自身が原点と捉える自然に向き合つたスピリチュアルな体験ができる地域としての可能性をもつと探るべきだと思うのである。そしてそのためには、まずこの地に住む我々自身がまず、自分たちの先祖がずっと大切に続けてきたものが何だったのか、そしてそれをこれからも受け継いで次の世代に伝えていくためにはどうすればよいのかを、真摯に考えることが今、必要なのではないかと思うのである。

東北各地で開催される多彩な祭りを見るのは楽しい体験である。そしてまた、その背景にそれらの祭りを始めた人のどんな願いや祈りがあつたか思いを馳せることもまたそれと同じかそれ以上に楽しい体験であるに違いない。

### 執筆者紹介

大友浩平

（おとおもこうへい）

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

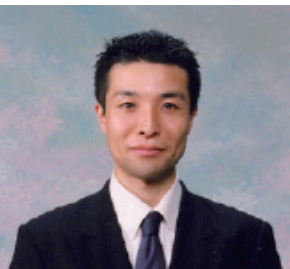
「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagma5/

F a c e b o o k

https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

kouhei.ootomo



祭りと是何か

日本人の信仰心

東北の祭りと信仰心

東北各地から出土する縄文時代の土偶、実に多彩な形の土偶や岩偶が見つかつている。あれが何なのかについてはいろいろな議論があつてまだ定まつていないが、これはまさに八百万の神のいくつかを縄文の人たちが具現化したものではなかっただろうか。縄文人の信仰も、まさに精霊主義（アニミズム）であつたとされる。現代の私たちが今も心の中に持ち続けている信仰はまさにここが原点であつたのかもしれない。

スピリチュアルツアーの地としての東北

こうした日本人ゆかりの信仰が今の息づく地域である東北の魅力は、残念ながらまだ十分には知られていない。現在は、パッケージツアーからカスタマイズされたツアーへと人々の関心が移ってきている。出羽三山で既に行われているような

山伏体験や宿坊宿泊などを伴つたオリジナルなツアーが、日本国内のみならず海外の旅行客にも注目されている。



## 理想という名の妄想から― 東北未来大予想図への道の事

先月九月に岩手の盛岡や遠野に約一年振りの旅をして、今月も少し北海道をバイクで走って来たら良いのだが・・・などと考えていたが、さすがにそれ程の余裕はないようだ―というより、一つ旅をしたらしばらくは日常をしつかり生きたい、と思うようになったのは齡のせいかな？まあ良からうなどと思っていたら、遙か西日本では盛大に万国博覧会が開催中なのをすっかり失念しており、調べたら閉幕まであと数日を残すのみになっていて、無論こちらも問答無用で断念という事に相成った。元々東北から遠い地のイベントで重要視はしていなかったが、昨年自身で出版した小説本の



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入ってもとりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

今絶望視されているように思われる東北の地から「未来随想」してみたい。

※

実は今年に入つて仙台市内の某喫茶店にて昭和の時代に想いを馳せ、当時ゆかりの品々を持ち寄りなどして様々に語らうという催しがあり参加する事がある。

自身にとつて昭和はせいぜい高校生時代までの事でありさほど語れるネタなどはないが、例えば当時少年誌や図鑑を彩っていた今となつては荒唐無稽な「未来予想図」の想定時代が実は直近の二〇二〇年代だったりする事で、当時の想像と実際の未来である現代の姿が如何に違うか、そして何故それほど違つてしまつたか―という事については非常に関心がある。

おそらく、一九七〇年頃の初回大阪万博を堪能した一〇代以降の人物が、現在の二〇二五年の日本を見たら頭を抱えてこう叫ぶかも知れない―「あまりにも何も変わつていない!」と。

確かに、特に東京の再開発されたビル群や自動車の形状は変化している。これらは各々のデザイナーにも長らくの未来イメージが影響している事もあるが、かつての「未来予想図」には必ずと言つていい程描かれていた空飛ぶクルマなどは一台も無く依然ゴムタイヤのままであるし、地上の路面にて相も変わらず慢性的な渋滞に苦しめられてい

る。鉄腕アトム並みのロボットは実現しておらず、人は尚も幾多の病に脅威を感じている。翻つて宇宙に目を向ければ、火星はおろか月にすら六九年以降一度も人の足跡は付けられていないし、一般居住の宇宙ステーションも存在しない。逆に当時の未来予想もSFすらも超えるインターネット及びスマートフォンが登場と普及は唯一、過去時代人に強烈な未来感を覚えさせる技術革新の形であろうし、かつて広く懸念されていた核戦争や公害による壊滅的地球環境破壊は起つていないところは良い意味でも未来が「何も変わっていない」とひとまず胸を撫で下ろす事のできる点とは言えるだろう。

しかしまた一方で中国に浸食され腐敗と混乱の極みにある政府によつて国民が思いもかけぬ海外地域の移民の大量入国が実行されようとし、いつの間にか誇るべき自国のモノづくりの地盤すら崩壊しかけているという現状は彼を失望させ「何もワクワクしない未来じゃないか!」と嘆かせてしまふかも知れない。それにしても、何故かつての昭和から平成に変わる時代には盛んに行われ、楽しまれた未来予想が、今はあまり見られなくなったのか。今、やはりかなりの程度かつての未来予想に近い時代になつてしまつたからなのか。確かに、近未来的

なビル群は既に来るところまで来たような景観ではあるし、クルマが揃つて空を飛ぶような光景は今後も見られない気がする。しかし絵に描くような事ではないまでも、未来を想い、語る事自体の関心が薄れた訳ではない。個人・社会問わず解決し難い問題が山積し、未来に希望を託す―世界情勢や医療、そして尚も続く宇宙進出の今後について、ネット上でも幾多のコラムや議論を目にする事ができる。つまり未来予想という事そのものがもう一つ違う次元・フェーズに入つているという事かも知れない。

今、政治的な場面でも対立を深める右派・左派と呼び合う人々―彼らそれぞれの思い描く理想の日本や世界は一体どのような姿なのだろうか―と想いもする。

ところで現在、未来予想というワードにてネット検索をかければ、相変わらず未来都市的な画像が出てきたりもする。無論それは東京を始めとする大都市の未来で、中には他ならぬ仙台市の今後の再開発関連の画像もある―只あたかも、日本の未来が大都市部にしかあり得ないかのような印象で、心に引つかつた・・・果たして「未来予想」は大都市の特権なのだろうか。

そしてもう一つ少し気になる話で、メタバース（ネット上に構築された仮想空間）を介したサービスの利用率が、日本では山形・福島・秋田の東北三県がトップを占めたという記事も目に留まつた。メタバースは専用のヘッドセットを使い遠隔で買い物や会議、ゲームなどを行える「もう一つの社会」であるとの事で、コロナ渦中に広まるもその収束後は撤退企業もある現状だが、当サービスは先進国よりも所謂途上国での利用が多いとの事で、東北が何も無い、不便な土地である証左か・・・とも勘繰られそうだが、青森や岩手はランキング外で、理由は不明との事―謎めいた、予想し難い東北の未来を思わせる話ではある。

ともあれ、個人的にやはり日本よりも先に東北の未来が思い描けなければ意味がなく、それ抜き議論は物足りない。自身の住む仙台は勿論大事だがそれは飽くまで東北の一部に過ぎない。特に仙台のような地方中枢の政令指定たる都市にはその地方全体を視野に入れた未来予想が為される責務があるはずではないか。これまで大都市ではない東北の各地域の魅力にも焦点を当ててきたが、殊多くの人々を地方へ繋ぎ止める役割を担う仙台について言えば、これほど充実度の高いと評される都市においてはまだ足りないものがある―だからこそ、依然多くの人々が首都圏へ流れていくのだと考えざるを得ない。もはや、東京に憧れてい

る段階ではない。だが「これでいい、丁度いい」と胡坐を掻いていて良い状況でもない―という事だ。

今月、宮城県知事選がある。今回の知事選は特別に全国的な注目を集めるといふ稀有な状況になつており、これは現知事が五期に渡る二〇年もの間知事の座にあつて環境・水道事業・移民政策などの点で多くの県民の意に沿わぬ政策がほぼ独断で行われている事を激しく批判した参政党代表と対立、参政党の応援する和田政宗氏が、六期目を目指すという現職の前に立ち塞がるという形となつている。反グローバリズムを志向しその主戦場を地方と位置づける参政党にとつて宮城県はその手始めの地となり、当知事選の結果が全国の今後に多大な影響を及ぼすとあつてその注目度は極めて高い。長らく空虚な絵空事に過ぎなかつた「地方の時代」という言葉が肌感覚で現実味を帯びてきた―そのような気さえさせる。

ところで件の和田氏が公約に掲げるところの『家庭毎、子供一人につき〇万円支給』『高校までの学費無償化』とするような経済支援策については、県民から「関東・関西にあるような、子供の夢を育める大規模施設が少ない」という声もあり、また『日本技術の粹である航空産業を宮城に誘致する』という提案について

いても県内の若者が東京圏へ出ていく事への解決策として充分とは思えない。

これは例えば、大きなイベントがあれば東京まで行けば良いというような、地元で完結せず大きな部分は「中央」に依存する体質が地域の魅力を削いでしまつている―その可能性と無縁ではあるまい。東京まで新幹線で近いから移動すれば良いと考えるのは仙台のエゴにも思える―仙台より東京から遠い東北他県は移動により負担がかかるのだ。

以前から個人的に主張しているように、出版企業や芸術大学の導入含め仙台が東京並みに文化的自立をしていけば東京流出が抑えられるどころか過去流出した人々の回帰や新規の移住が増えていく可能性がある。

仙台の一極集中ではないか？未だそんな声が聞こえてきそうだが、東京の一極集中と仙台のそれは違う。東北各県から、不満・問題を感じた若者らが仙台に集まり、問題のある地元を変える為の、いつか戻つていくける為の解決策を練る場を作るべきだ。東京へ出て行つても、東京では地方を変えられない。行つたきりになり



『昭和少年 SF 大図鑑』  
(河出書房新社)より





秋祭り



神輿の還御



権現舞

シリーズ  
遠野の自然  
「遠野の寒露」  
遠野10000景より

九月の終わりになっても東京の気温は真夏のままで、十月の初めまでその暑さが続き、季節感覚がまったく薄れていた。  
それなのに、大型台風が近づき、そして遠ざかると一気に涼しくなった。

全国的に暴れ回った線状降水帯による大雨洪水注意報は、今度は、台風による大雨強風注意報に変わった。ようやく通常の季節感が戻ったかと思われて、妙に安心できるのが不思議だ。とはいえ、日本列島を取

り巻く海は依然として温かいままだ。そのためか、例年の台風発生場所ではなく、列島のすぐ近くで発生している。地球温暖化の影響は全然収まってはいない。



花笠



流鏝馬



リスの冬支度



ナナフシ



猿田彦



## シリーズ【東北を再発見する旅】…②③「『笑い仏』福島で開眼法要」 3年3ヶ月で各地を周って福島・富岡の浄林寺に到着した『笑い仏』



富岡町・浄林寺に安置した『笑い仏さん』



富岡町・浄林寺に集った『笑い仏』関係者



富岡町・浄林寺の開眼法要に集った地元檀家の人々



浄林寺・早川住職のごあいさつ

今から十年前の八月六日、陶器の破片を「ガレキの光背」とした『笑い仏』さんが福島県富岡町の浄林寺で開眼法要されることに伴って出かけた取材旅行だった。この『笑い仏』さんは三年三か月かけて全国を周って福島を目指したが、やっと安住の寺に安置された。その記事を最初から最後まで当新聞にご寄稿いただいたのが、MONKフォーラム代表の平原憲道・長谷川

稔の両氏だった。実に長期間のご寄稿であり、また『笑い仏』さんと共に一緒に旅をしている感覚があり、満願を迎え感慨深いものがあつた。そこで、昔を偲び、十年前の寄稿を以下に転載する。

さつた皆様は約百五十名。開眼法要を前にしての笑い仏さんにちなんだ数字たちです。ふとした縁の積み重ねで始まった『笑い仏』さんを福島へ届ける旅は、今年六月に浄林寺（福島県双葉郡富岡町）においてご住職と檀家の皆様に暖かくお迎えして頂いた瞬間、一区切りが過ぎました。寺院関係者の方々、拝観し浄財をご寄附頂いた方々をはじめ、

関わりを頂いた全ての皆様に心から御礼申し上げます。浄林寺で八月六日に執り行われる施餓鬼法要に合わせ、開眼法要と共に笑い仏さんのお迎えをして頂くことに決まったのが先月のこと。このお寺は福島第一原発事故後の避難指定地域に当たり宿泊ができないため、檀家さんも別の場所に避難し不自由な暮らしを強いられています。その皆さんがお盆に一堂に会し、ご先祖様と繋がる大事な法事が施餓鬼供養です。そんな重要な日に「ヨソモノ」の我々がお邪魔してよいものか：という不安は、我々を出迎えた百五十人の笑顔で一気に杞憂となりました。法要は十時に開始。張りのある声で集まった檀家さんを鼓舞しながらも、漫談のようなユニークな語り口で味わい深い法話をされるの

が早川住職です。遠方から来た我々 MONK フォーラムを丁寧に労いながら、私に笑い仏プロジェクトの経緯説明を促し、山本竜門仏師に思いを尋ねる様子は正に名司会でした。続いて、逗留寺十六番札所である神奈川の浄源寺から参加された森住職と、その尺八の師である茨城の三井氏から奉納演奏をして頂きました。曲目は「琴古流本曲鹿の遠音」。秋の深山幽谷に鹿が鳴き交わす様子を写生したという江戸の調べに皆が癒されました。それから、まずは開眼法要が、続いて施餓鬼法要が十名ほどの僧侶と共に荘厳に執り行われました。

笑い仏さんが終の住処に到着したというニュースは複数の現地メディアに取材されました。福島放送局には当日の夕方のニュースで



MONKフォーラム代表平原憲道氏のごあいさつ



割れた陶器で出来た光背の『笑い仏』拡大図

が終わり、昼食を頂いた我々は、ご住職の案内する車でこの無慈悲な現実を教えられました。そこには「復興」という二文字が一瞬で霞んでしまう「帰れない現実」がありました。旅館・店舗・住宅街はそのまにカーテンが閉められ、人っ子一人見られない土地にもかわらず、道路が原発作業や除染作業に従事する車両で渋滞する異様な光景。そして、汚染土を入れた黒いフレコンバッグが累々と地平線を埋め尽くす。まるでSF映画の一場面を見ているかのような、現実味の無い白昼の光景は衝撃でした。

放映して頂き、福島民報には二日後に大きな記事にして頂きました。三年間の旅路において新聞やラジオなど多くのメディアに取材されましたが、やはりゴールの地における取材には感慨深いものがありました。旅を始めた三年前には最終目的の寺はおろか次の逗留寺しか決まっておらず、

成否すらも不透明なプロジェクトでした。「福島へ笑顔届けたい」という関係者の強い思いだけで歩き始めた笑い仏さんは、我々の予想を超える縁を繋げながら、皆に運ばれ、遂に永住の地へと到着したのです。今後は、ここ浄林寺にて、福島復興を見守ることでしよう。 合掌





写真でお伝えする  
東北の風景  
「秋の鹿の群れ」  
写真撮影 尾崎匠

